

『本を読むひと』

2017年02月06日

フランスの作家アリス・フェルネ著、デュランテクスト冽子訳の『本を読むひと』に引き込まれて、一気に読んだ。ジプシー一家に、一人のフランス人女性の図書館員が関わる感動的な物語である。ジプシーは10世紀頃、インドがイスラム教徒に侵略され、最下層の人々が北インドに逃れ、移住したことから始まったと言われている。現在、「ロマ」と言い換えられることが多くなっている。彼らは数百年かけて、エジプト、トルコ、ヨーロッパ諸国に広がって行った。ジプシーは強いアイデンティティを持った民族であるが、国家を持たず、放浪し、差別と迫害を受け、悲劇的な歴史を刻んできた。

物語は、ゴッドマザーの57歳のアンジェリーヌばあさん一家に、図書館員エステールが訪問することから展開していく。アンジェリーヌには5人の息子がいて、長男は独身、他の4人の息子には嫁がいて、8人の孫がいて、大家族で暮らしている。彼女は夫を亡くしたのに、胎内に子どもを宿し、育めないのが何より寂しいと言う、情とエネルギー溢れる「肝っ玉」ばあさんである。一家は無断で住みついた元ホテルを追われ、郊外の空き地に、おんぼろトラックとキャンピングカーで暮らしている。そこは、電気、ガス、水道もなく、ガラスのかけらや泥だらけの所である。社会から除け者にされ、身分証明書も社会保障もない。字が読めないから、本など一冊もない。極度の貧しさが希望を失わせ、喧嘩とセックスで自分たちの現実と絶望感をまぎらわせる。今ある生活を受け入れ、ただ生きているだけである。家族が愛し合い、助け合っていくことだけが喜びであった。そこへ、エステールが子どもたちを訪ね、本の読み聞かせを始める。大人たちは「外人」と言って警戒するが、子どもたちは読み聞かせを喜び、身じろぎもせず、耳を澄ませて聞き入る。週に一度来る彼女を大人たちも受け入れて、不思議な温かい交流ができていく。文字を知らなかった彼らは物語を聞いて新しい世界を知り、自らを表現し、思考する息吹を与えられていく。エステールは彼らに問うことはなく、聞かれたことを答えるだけで、思慮深く、忍耐強く一家と関わっていく。アンジェリーヌが「お前は名前からして、ユダヤ人か」と聞くと、「そうだ」と答える。ジプシーとユダヤ人はナチスによって迫害された者同士、アンジェリーヌは親しみを込めてキスをする。

一家には喧嘩が絶えず、一人の嫁は子どもを連れて家出をしたり、孫が交通事故によって命を落とすなど、幾多の波乱はあるが、アンジェリーヌの統率の下、家族は守られていく。足を滑らして怪我をし、寝た切りになった彼女は自分の死を察知し、族長ヤコブのように、息子、嫁、孫を呼び、遺言を告げる。一人の嫁に下記のように語っている。「あんたは子供が二人あって、あんたに首ったけのダンナがいる。楽しむんだね。そりゃ誰かを愛するってのは、苦しいことさ。だけどね、一番ひどいのは愛する人がいないこと。人間はね、そのためにできてるのさ。女は男以上に人一倍そうなんだ。女って、一心に愛するようにできているのさ。抑えなくてもいいんだよ。心の中に溜めておくものはいつか消えるけど、人に与えたものは、実を結んで大きくなるのだ。」

アンジェリーヌの逞しい愛と、無知で粗暴で、汚く臭い一家に何年も関わり続けたエステールの献身的な姿が描かれている。原題は『恩寵と貧困』で、彼女自身も一家を必要としており、一方通行な愛でないことが本書の奥深い主題になっている。『本を読むひと』は本を読むことによって自立と希望を育てる素晴らしさを謳いあげた本である。フランスでは20年にわたるベストセラーだそうで、失われた者に心を寄せ、共に分かち合って生きる姿を描いたキリスト教精神に貫かれた本で、心洗われた一冊であった。